

職場からの声を一切受け止めず、現場の奮闘に報いない年末手当低額回答に対する怒りをバネに、
全組合員の総力で組織強化・拡大をつくり出す大宮地本声明

2024年11月15日、中央本部は年末手当3.7ヶ月満額回答への再考を求めて、申5号「組合員・社員の労働実感と生活実感の切実な現実と声に応え、現場第一としない経営姿勢の是正を求める年末手当に関する緊急申し入れ」団体交渉をつくり出した。しかし、会社は第3回交渉の回答である2.8ヶ月+0.1ヶ月を再考する姿勢は全くなく、全地本代表者会議において議論した結果、苦渋の決断として妥結の判断に至った。11月12日に行われた第3回交渉以降に実施した緊急アンケートは、16,387件に上り、組合員のみならず未加入者や社友会会員の切実な生の声を、具体的に会社へ訴えてきた。しかし、これらの声を何度も「受け止める」としながらも「回答の修正はない」「再回答の要求に応じる考えはない」との会社回答を繰り返した。好調なGW・夏季輸送の実績や全ての系統で過去に類を見ない厳しい要員不足と「融合と連携」による過去最高の働き度の中、統括センター化や相互運用、組織再編に伴う業務量の増加、企画業務やインバウンド対応等、年間6ヶ月以上を目指して3.7ヶ月要求は当然の要求だとして、職場から創造的なたたかいをつくり出した。各支部・各分会では私たちを取り巻く情勢についての討議資料作成や、アンケートの取り組み、本部激励行動を通じて、多くの組合員・未加入者と要求根拠を明確にする運動が展開された。

大宮地本として、11月7日に年末手当満額獲得総決起集会を開催し、100名を超える仲間が結集した。集会の中では職場からの悲痛な声が相次いだ。「コロナ以降増加した業務として、ワンマン運転、連結、分割、相互運用、改札、出札、多客時の案内、車内清掃、無人駅の車いす対応、貫通作業、遺失物扱い、しかし賃金は上がらない」「要員不足で休日出勤3回、増し乗務、行路移管、管理者乗務で職場は疲弊している」「通常業務の他に真夏の線路脇の除草作業、PCBを含む全灯具の調査等が加わり、年間超勤300時間を超える者もいる」といった職場現実をみれば、今、年末手当3.7ヶ月要求は当然の要求であり、参加者全員が満額を勝ち取ることを確認した。さらに、「理不尽な会社の対応に我慢できず、JR東労組への再加入を決意した」と再加入した仲間からの力強い発言もあり、中央本部のたたかいを後押しすることが出来た。

しかし、申4号団体交渉の中で会社が「上半期の業績や経営状況等を総合的に勘案して、最大限できる回答として2.8ヶ月」「構造改革の進展と成果、物価上昇等に伴う生活実感を踏まえ0.1ヶ月を加算」とする回答が出され、怒りの声が沸き上がった。感想として「3ヶ月は間違いなく出ると思っていた」「+0.1ヶ月という打ち出し方が許せない」「これではモチベーションは上がらない」など会社回答への怒り、呆れ、失望の声が出ている。中央本部は低額回答に席上妥結せず、再申し入れを通告し、緊急申し入れ団体交渉に臨んだが、緊急アンケートの9割以上の不満の声に対して会社は「『出てよかった』』というようなポジティブな意見を多々いただいている」として回答を撤回することはなかった。我々JR東労組が時間をかけて集約した職場の声と大きな乖離がある回答であり、会社のいうポジティブな意見とはどこで集約した声なのか。我々が集約した声をネガティブだとする会社姿勢を到底許すことはできない。

職場では過去最高の労働実感と生活実感に加え、パワハラや不当労働行為、様々な事象に対する厳罰化により、組合員・社員の意欲を削ぐ悪質な行為が繰り返されている。宇都宮運輸区で発生した懲罰的日勤教育や大宮運輸区で発生した不当処分・不当転勤と同様に八王子では若い組合員に対する暴力事件まで発生している。「安全は経営のトッププライオリティ」と言うものの、新幹線での相次ぐ車両不具合による輸送混乱により、社員への負担と、お客さまに多大なご迷惑をお掛けしていることから、我々JR東労組から安全文化の再構築を実践しなければならない。大宮地本は11月15日緊急に全支部代表者会議を開催し、年末手当のたたかいについて総括してきた。+0.1カ月の示し方への怒りや職場の声を確認した。そして、短期間で多くの組合員・未加入者から声を集約できた根拠は何か。その根拠を明確にして、改めて組織強化・拡大を押し進めていくことを確認した。年末手当2.8ヶ月+0.1ヶ月の低額回答の悔しさを組織強化・拡大につなげ、明るく安心して働ける職場をつくり出していくことを全組合員に訴えて大宮地本執行委員会の見解とする。

2024年11月18日
東日本旅客鉄道労働組合
大宮地方本部